

國語調査委員會編纂

國字國語改良論說年表

發行所 日本書籍株式會社



理学部 和 遡及
022132005000243

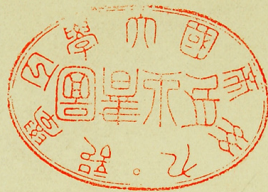
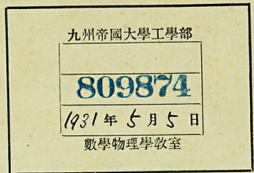


九州大学蔵書

九州帝國大學理學部

8796

物理學教室



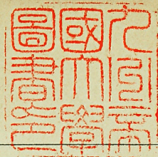
凡例

ハ本會調査ノ進行上、國字國語ノ改良ニ對スル公私ノ施
者ノ所説、及ビ世論ノ傾向ヲ知ルノ必要アルヨリ、維新前
奏議、建築ヲ始メ、從來幾多ノ書籍、新聞、及ビ雜誌等ニ發表
レタル論説ニシテ、苟モ事此ニ關係セルモノハ、皆其主意
ヲ摘ミ、其發表ノ歲月ヲ逐ヒテ之ヲ列記セルモノナリ。

一 本書ノ稿ヲ起スヤ、數人ノ手ニ藉リテ其材料ヲ蒐集セリ、故ニ
間々摘要ノ精疎ト記述ノ體裁トニ差異アルヲ免レズ。又維新
以來新聞雜誌ノ浩瀚雜多ナル、殊ニ其僻遠ノ發行ニ於ケルモ
ノニ至リテハ、耳目ノ至ラザルモノ、旁求ノ及バザルモノ、頗ル
多シト爲ス。是等ハ大方ノ注意ト補正トニ頼リテ、他日大成ス

凡例

一



凡例

一 本書ハ本會調査ノ進行上、國字國語ノ改良ニ對スル公私ノ施設、學者ノ所説、及ビ世論ノ傾向ヲ知ルノ必要アルヨリ、維新前後ノ奏議、建策ヲ始メ、從來幾多ノ書籍、新聞、及ビ雜誌等ニ發表セラレタル論説ニシテ、苟モ事此ニ關係セルモノハ皆其主意ヲ摘ミ、其發表ノ歲月ヲ逐ヒテ之ヲ列記セルモノナリ。

一 本書ノ稿ヲ起スヤ、數人ノ手ニ藉リテ其材料ヲ蒐集セリ、故ニ間々摘要ノ精疎ト記述ノ體裁トニ差異アルヲ免レズ。又維新以來新聞雜誌ノ浩瀚雜多ナル、殊ニ其僻遠ノ發行ニ於ケルモノニ至リテハ、耳目ノ至ラザルモノ、旁求ノ及バザルモノ、頗ル多シト爲ス。是等ハ大方ノ注意ト補正トニ頼リテ、他日大成ス

凡例

一

ルノ時ヲ俟テ改定セシムトナ期ス。

一本書各事項中、發表月日ノ不明ナルモノハ、之ヲ歲月ノ末ニ記シテ其月日ヲ掲載セズ。

明治三十七年三月

國語調査委員會

國字國語改良論說年表



國語調査委員會編輯

年	月	日	事	項	掲載書目
慶應元年					
慶應二年	十二月		前島密、國字國文改良ノ議ヲ將軍徳川慶喜ニ上ル。		
慶應三年					
明治元年					

國字國語改良論說年表

國字國語改良論說年表

年	月日	事	項	掲載書目
明治二年	四月 五月	柳河春三、布告ノ書ニ假名文ヲ用キ且板行ニスベキコトヲ建白ス。 南部義壽、「修國語論」ヲ大學へ建議ス。		洋々社談
明治三年	五月	前島密、「國文教育之議ニ付建議」「廢漢字私見書」等ヲ集議院ニ提出ス。		
明治四年	八月	南部義壽、前議ヲ復ビ文部省へ建議ス。		
明治五年	四月 七月	南部義壽、文字ヲ改換スル議ヲ文部省へ建議ス。 文部卿大木喬任、漢字ノ數ヲ減ズル意アリ、田中義廉、大槻修二、久保吉人、小澤圭次郎、ニ命ジテ、新撰字書ヲ編輯セシム。		洋々社談
明治六年		前島密、「學制御施行ニ先テ、國字改良相成度卑見内申書」ヲ右大臣岩倉具視ニ上ル。		

明治七年	五月	清水卯三郎、「平假名ノ説」ト題シ、平假名ハ國語ヲ書スルニ最モ可ナルノ説ヲ述ブ。		明六雜誌第七號 同上第十號
明治八年	九月 四月 九月	西周「洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」ト題シ、羅馬字說ヲ主張ス。 北米エール大學教授ホイトニー(W. D. Whitney)、明治五年六月書ヲ森有禮ニ送リテ、同氏ノ英語ヲ以テ日本語ニ換フル意見ノ極テ不可ナルヲ切論ス。 西村茂樹、「西氏ノ説ヲ評ス」ト題シ、洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ不可ナルヲ論ズ。		明六雜誌第一號 Education in Japan, New York, 1872
	八月 九月十三日	阪谷素、「質疑一則」ト題シ、萬國文字言語ヲ一ニセンコトヲ論ズ。 文部省中書記熊澤有義、同省九等出仕山田元正、同省中視學中村六三郎ノ三名、文體ヲ一定スベキ五案ヲ立テ、其何レカラ採用セラレンコトヲ建議シ、之ヲ當時召集中ノ地方官ニ諮問シテ調査ノ上上申シタリ。 文部省ニ於テ、小學校教授用トシテ羅馬數字圖并ニ算用數字圖ヲ刊行ス。 廣島師範學校長久保田讓、下等小學第六級ヨリ羅馬字ノ讀ミ方、綴リ方、書キ方ヲ教授スベキコトヲ文部省ニ建議ス。		
	九月	文部省八等出仕大槻文彦、文憲寮設立ノコトヲ建議ス。 在東京小田縣士族渡邊修次郎、日本文ヲ簡便ニスベキ建議ヲ文部省へ提出		

國字國語改良論說年表

國字國語改良論說年表

年	月 日	事 項	掲載書目
明治九年	六月	文部省ニ於テ西字成音圖、西字濁音并次清音圖、羅馬頭字圖、羅馬小字圖、書寫頭字圖、書寫小字圖等數葉ヲ刊行ス。 ス。	
明治十年			
明治十一年			
明治十二年	十月 十一月	學士會院會員福羽美靜ノ提出セル『學士會院ニテ日本文法書ヲ作ラントスル議』ヲ可決ス。 西周、學士會院ニ於テ福羽美靜ノ議案ヲ贊成シ、且ツ同院ニ附屬シタル日本文學社ヲ設立シ、以テ國語學上ノ諸事項ヲ調査セントノ意見ヲ演ブ。	學士會院雜誌一ノ 九 同上ノ十

明治十三年	二月	學士會院文法書編纂ノ舉ヲ文部卿ニ開申スベキニ決シ、之ニ就キテ加藤弘之、文部卿ノ修正、文法ノ設定等ニ着手スルニ先チ、博言學研究ノ爲メ俊秀ヲ歐洲ニ留學セシメ、其歸朝ヲ待チテ着手アラシコトヲ、本院ヨリ文部卿ニ開申セントノ建議アリ。	學士會院雜誌二ノ 二
明治十四年	三月 十二月	西周、學士會院ニ於テ『加藤弘之博言學議案ノ議』ト云フヲ述ベ、加藤弘之ノ議ニ反對ス。 伊藤圭介、『これもまたくちよくいふべくして、そのことはおこなはれがたさのせつ』ト題シ、漢字ヲ廢シテ假名ヲ採用セントラ望ミ、其利便ヲ説ク。	同上
明治十五年	四月二十五日 七月八日	矢田部良吉、『羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ說』ト題シ、現用文字ノ困難ニシテ文運ヲ阻礙スルヲ説キ、羅馬字採用說ヲ唱ヘテ其方法ニ及ブ。 英人イービー(B. B. I.)、『羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ說』ト題シ、人民ノ發達ト文字トノ關係上ヨリ立論シテ、其然ルベカラザル所以ヲ述ブ。	東京學士會院雜誌 三ノ十 東洋學雜誌七、 八 六合雜誌三ノ二十

國字國語改良論說年表

年	月 日	事	掲載書目
明治十六年	三月	池原香穂、西徳次郎、片山淳吉、吉原重俊、高崎正風、高橋新吉、那珂通世、南部義壽、内田嘉一、大槻文彦、丸山作樂、福羽美靜、近藤真琴、有島武、宮崎蘇庵、清水卯三郎、物集高見ノ十七名『かなのとも』ヲ組織ス。	
	三月	『かなのとも』其趣意書ヲ公ニス。	
	五月	かなのとも『かなのみちびき』第一ノ巻ヲ發行ス。	
	七月一日	いろは會、いろは文會、いつらの友等、相合同シテ『かなのくわい』ト改稱シ、之を月雪花ノ三部ニ分ツ。	
	九月	かなのくわい、『かなのまなび』第一號ヲ發行ス。	
	九月	三宅米吉、音ノ關係及ビ沿革ヲ論ズ。	
	十月	べ、マ、エト(P. Maet)獨逸協會ニ於テ、漢字ノ困難ヨリ起ル教育上ノ損失ヲ演ブ。	かなのまなび二 東京日々新聞
	十月ヨリ十二月ニ涉リテ、かなのくわい員大槻文彦、同會ノ批難ノ諸新聞紙ニ出デタルニ對シテ、十數篇ノ辯駁文ヲ草シテ投書ス。		かなのくわい大戦 争一、二、三、四 ノ四冊ニテ完結
	十二月二十八日	『かなのくわい大戦争』第一冊ヲ發行ス。	
明治十七年	一月二十五日	東京京橋區西紺屋町十九番地萬年會ニ於テ、渡邊洪基、大槻文彦、丸山作樂、物集高見、殖田直太郎、清水卯三郎、平田東雄ノ七氏相會シ、語學社	

二月二十日	(コトバノトモ)第一會ヲ開ク、爾後毎月開會第六會ニ及ブ。 かなのくわい會員某、『文の書方につきて』ト題シテ、言文ヲ一致セシメン コト、及ビ横列體書方ノ採用ヲセラレンコトノ希望ヲ述ブ。	語學社記事 かなのまなび六號
二月	外山正一『漢字ヲ廢スベシ』ト題シテ、假名の會ノ總寄合ニ於テナシタル演說筆記ヲ公ニス。	東洋學藝雜誌二十 九號三十一、三十一
四月	金田豐太郎、『假名文の書方大凡の定』ト題シ、文ハ俗言及ビ耳近キ雅言ヲ以テ記スベキコト、漢語ニテモ義義明瞭ナルハ強ヒテ和語ニ改ム可キ要ナ キコト等ヲ説ク。	かなのみちびき十 三號學會雜誌六ノ 四
四月	西村茂樹、文章論ヲ學士會院雜誌ニ出ス。	
四月	三宅雄二郎、『假名軍の猛將をして一驚を喫せしむ』ト題シ、漢字ノ目ニ入 リ易キ點ヲ擧ゲテ假名專用說ヲ貶シ、終ニ己ハ羅馬字說ナルモ行フニ難ケ レバ、暫ク漢字假名併合說ニ從フト説ク。	東洋學藝雜誌三十 一 同上三十二
五月	外山正一、『三宅氏ノ文ヲ讀ミテ百驚ヲ喫セリ』ト題シ、前論ヲ反駁ス。	
六月	鈴木辰海、『謹デ假名ノ會員ニ謀ル』ト題シ、漢字ヲ廢シテ片假名ヲ單用ス ベキコトヲ論ズ。	同上
六月	外山正一、『漢字を廢して英語を楨に與すは今日の急務なり』ト題シ、漢字 ヲ驅逐セザレバ、智識難蔽セラレテ西洋諸國ト競争スベカラズ。國字トシ テ羅馬字最モ可ナレドモ、賛成者少キヲ以テ暫ク假名說ニ從フト説ク。	東洋學藝雜誌三十 三
七月一日	語學社、かなのくわいト合併シ、社名ヲ廢シテ『かなのくわい』ト改稱シ、會ヲかなのくわい事務所ニ移ス。	語學社記事

國字國語改良論說年表

年	月 日	事 項	掲載書目
	七月三十日	『かなのみちびき』ヲ『かなのしるべ』ト改メ、其第一號ヲ發行ス。	かなのしるべ二、三號
	八月三十日	三宅米吉、『國々の訛言につきて』ト題シ、假名ヲ専用センニハ言文一致ノ必要ナルコト、言文ヲ一致セシメントセバ、國々ノ方言ヲ檢シテ標準語ヲ定ムベキコトヲ論ジ、方言調査ノ方法ヲ述ブ。	かなのしるべ二、三號
	十月十五日	神田孝平、學士會院ニ於テ、『文章論(西村茂樹)ヲ讀ム』ト題シ、其改良法ノ説ヲ駁シテ言文一致論ヲ説ク。	學士會院雜誌七ノ一
	十一月四日	迂默齋、『國語ノ利害ヲ論ズ』ト題シ、思想ト言語トノ關係ヲ説キ、日本語ニ於ケル缺點ヲ指摘ス。	六合雜誌四十八
	十一月四日	外山正一、紅葉館ニ於テ漢字排斥論及ビ排斥ノ方法ヲ演ブ。	
	十一月四日	元田直、紅葉館ニ於テ漢字排斥及ビ假名専用ノ方策ヲ演ブ。	
	十一月	尾關彌兵衛、大谷木備一郎、大島爲太郎等、發起シテ名古屋ニかなのくわいあいち組ヲ設立ス。	
	十一月	榎本安五郎、齋藤のぼる、さかまきていたらう等ノ諸人、發起シテかなのくわい千葉組ヲ設立ス。	
	十二月二日	外山正一、羅馬字會創立會ニ於テ羅馬字會ヲ起スノ趣意ヲ演ブ。	東洋學藝雜誌三十
	十二月	外山正一、『新體漢字破』ヲ出版ス。	

明治十八年

一月二日	平岩愷保『日本文字の論』ト題シ、神字ヲ訂正シテ十九字トナシテ曰ハク、若シ之ヲ以テ國語ヲ寫サバ、其いろは及ビ片假字ヨリモ更ニ簡便ナルヲ以テ、文連ニ益スルコト大ナラント説ク。	六合雜誌五〇、五一
一月二十日	島野せいいちらう『假名文を三とほりにわくる論』ト題シ、日用文ハ東京ノ中流語ヲ以テ記スベシト説ク。	かなのしるべ七
一月	芳賀真咲、鹿又祐藏、大石兵藏、清水廣景、重久安都男、鈴木田正雄、原田勇美等ノ諸人、發起シテかなのくわい宮城野組ヲ設立ス。	
二月	片山淳吉『かなのけういく』ト題シ、漢字ノ害ヲ數ヘ、假名教育ノ方法ヲ述ブ。	大日本教育會雜誌十六、十七
三月十六日	高橋五郎、平岩愷保ノ説ヲ駁ス。	六合雜誌五二
三月	羅馬字會、羅馬字ニテ日本語ヲ書ク方法ヲ議定ス。	六合雜誌五三
四月三十日	平岩愷保、高橋五郎ニ答フ。	
四月	羅馬字會、羅馬字ニテ日本語ヲ書ク方法ヲ發表ス。	
五月二十五日	矢田部良吉、『羅馬字會書キ方の理由』即チ 第一 假名ノ用キ方ニ據ラズシテ發音ニ從フコト。 第二 尋常ノ教育ヲ受ケタル東京人ノ間ニ行ハル、發音ヲ以テ成ルベク標準トスルコト。 第三 羅馬字ヲ用キルニハ其子字ハ英吉利語ニテ通常用キル音ヲ取り其母字ハ伊太利亞語ノ音(即チ獨逸語又ハ拉丁語ノ音)ヲ採用スルコト。	

國字國語改良論說年表

國字國語改良論說年表

年	月日	事	項	掲載書目
	六月十日	ノ説明ヲ示ス。 ト。		
	六月十日	羅馬字會、羅馬字雜誌第一號ヲ發行ス。		羅馬字雜誌一號
	六月十日	島田三郎『羅馬字の便利』ト題シ、大ニ活版植字ノ手間ヲ省クコトヲ説ケリ。		東洋學藝雜誌四十四
	七月一日	『かなのしるべ』ヲ『あ、かなしんぶん』ト改メテ第一號ヲ發行ス。		
	七月十日	三宅雄二郎『文字の争』ト題シ、英語ノ廣ク歐洲ニ行ハル、ハ、シエークスビヤ、ペーコン、ロック、ニエーロン等諸文豪ノ出デタリシガ爲ナリ。		
	七月十日	羅馬字ヲ廣ク行ハシメントセバ該文字ニテ大詩文ヲ草セザル可カラズ。大詩文ヲ作り出ダサントセバ、大ニ之ガ練習ヲ爲サマル可カラズト説ク。		
	七月十日	鈴木唯一、『手紙の書方』ト題シ、難字難語ヲ用キル可カラズト説ク。		羅馬字雜誌二號
	七月十日	かなのくわいかさかたかいりやうぶ『かなのざつし』第一號ヲ發行ス。		
	七月	高田早苗、横濱攻學會ニ於テ、英語ヲ以テ日本ノ邦語ト爲ス可キノ説ヲ述ブ。大要ハ、世界各國ノ言語ヲシテ一ニ歸セシムルノ目的ヲ以テ、先ヅ我邦語ヲ變ジテ英語ト爲ス可シト云フニ在リ。		
	八月九日	エフ、シロダ、教育會常集會ニ於テ『日本國語論』ト題シ、漢語ヲ排斥シ洋語ヲ採用シテ國語ノ語彙ヲ豐富ニシ、教科書ヲ一様ニスベシト演ブ。		中央雜誌十號
	八月	田中館愛橋、羅馬字意見ヲ述ブ。		大日本教育會雜誌二十六號 理學協會雜誌十六號
	十月十日	松井直吉、『文字の歴史』ト題シ、文字ノ歴史ヲ畧叙シ、漢字ヲ排斥シテ羅		

年	月日	事	項	掲載書目
明治十九年	十一月二十日	馬字ニ改メザル可カラズト説ク。 み、よ、『俗語をいやしむ』ト題シ、俗語ヲ以テ文章ヲ草スベシト説ク。		羅馬字雜誌五、六、七號 初號六、七、八、九、十、十一、十二號 六、七、八、九、十、十一、十二號
	十一月十日	矢田部良吉、文字ハ知識ヲ得ル道具タルニ過ギザレバ、文字ヲ學ブニシテ力ヲ勞スルハ愚ナレバ、一日モ速ニ漢字ヲ驅逐セザル可カラズト説ク。		羅馬字雜誌八號
	一月二十三日	羅馬字會第一總集會席上ニ於テ、井上馨、文字ノ綴リ方ヲ論ズルニ先チテ、文法書ヲ編纂スベシト述ベ、英國公使フランケット (Frankett) ハ羅馬字ノ便利ナルコト及ビ其施行方法ヲ演ブ。		
	二月二十五日	矢田部良吉、『教育家の一讀を煩はす』ト題シ、西洋流ノ開化ヲ輸入スベシト決定シタル上ハ、羅馬字ヲ用キルコトニ着手セザル可カラザルコトヲ論ズ。		東洋學藝雜誌五十
	三月	矢野文雄、『日本文體文字新論』ヲ出版ス。		
	三月	物集高見、『言文一致』ヲ出版ス。		
	四月十日	ラッペ、ペリオー (L. Abbe, Perlior)、『羅馬字の便利』ト題シ、函館羅馬字傳習會ニ於テ爲シタル演說筆記ヲ載ス。		羅馬字雜誌十一號
	四月十日	大森惟中、教育會總集會ニテ『文章ノ變遷』ト題シ、教育ト言語文字トノ關係ヨリ説キ起シ、和漢文章ノ變遷ヲ略叙シ、外國語ノ傳來ニヨリテ固有ノ言語文章ノ廢頽スル所以ヲ説キ、當今文章ノ晦澁ニシテ教育ニ害アルヲ歎ズ。		
	五月十日	羅馬字新誌社、羅馬字新誌第一號ヲ發行ス。		

國字國語改良論說年表

國字國語改良論說年表

年	月日	事	掲載書目
	五月十日	羅馬字新誌第一號ニ於テ、其羅馬字用法ヲ發表ス。	東洋學藝雜誌五十六號
	五月二十五日	氏家鹿三郎、矢田部良吉ノ『教育家の一讀を煩はす』ニ對シテ反駁シ、外面忠臣内心賣國ノ士ト罵ル。	
	六月十日	北川乙次郎、『吾々の選びたる文字に如何なる名を與へんか』ト題シ、廿六字ノ讀方ニ就キテ意見ヲ述ブ。	羅馬字新誌二、三號
	七月十日	天野謙『羅馬字會の爲に辯ず』ト題シ、ガハレンツ(Gayon d. Gabelentz)ノ羅馬字書キ方ハ、日本語學上ノ法則ヲ破壞スルモノナリトノ說ヲ駁ス。	羅馬字雜誌十四號
	七月十五日	『いかなしんぶん』かなのてかがみ』ト改題シ、其第一號ヲ發行ス。	羅馬字雜誌十五號
	八月十日	アル、アラン(R. Alin)羅馬字使用法ノ意見ヲ羅馬字雜誌ニ寄ス。	同上
	八月十日	George A. King、羅馬字ノ普及ニツキテ說ク所アリ。	
	八月十五日	高橋新吉、『文字改正の問題』ト題シ、文字ノ起源ヨリ立論シ、和字ト漢字及ビ和字ト洋字トノ優劣ヲ論ジ、日本語ヲ寫スニハ日本固有文字ヲ最モ適當トナスト述べ、其書方及ビ文法ノ事等ニ及ブ。	
	八月三十一日	植村正久、『羅馬字會と假名の會』ト題シ、日本將來ノ文字ハ羅馬字ナラザル可カラザル所以、及ビ羅馬字派ノ振ハザル理由ヲ論ズ。	六合雜誌六十八、六十九號
	九月十日	青木セイジロー、羅馬字略號ニツキテ意見ヲ述ブ。	羅馬字雜誌十六號
	九月	帝國大學ニ博言學科ヲ置ク。	
	十月十日	實吉益美、發音ニ依ツテ言葉ノ綴字ヲ略スベキ說ヲ述ブ。	羅馬字新誌六七、七八號

年	月日	事	掲載書目
明治二十年	十月十五日	松尾ながゆき、『支那人も漢字の多きを苦んで假名を用ふ』ト題シ、其例ヲ示シ之ニ因ルモ漢字ハ早晚廢セラルベキモノナリト論ズ。	かなのてかがみ四號
	十月三十日	羅馬字會ノ書方及ビ其態度前途等ニツキ、記者ト米國博士フルベツキトノ問答ヲ掲グ。	六合雜誌七〇
	十一月十四日	川田剛、學士會院ニ於テ『日本普通文字ハ將來如何ニナリ行クカ』ト題シ、聲音言語ノ變ゼザル限リハ、政府ノ威力ト學者ノ筆舌トヲ以テ、俄ニ文字ヲ改革スベキニアラズト斷ズ。	學士會院雜誌九ノ一
	十一月	末松謙澄、日本文章論ヲ著ハス。	
	十二月十日	草野紋平、『羅馬字をあせなく世に行はするにつき意見』ト題シ、其方法ヲ述ブ。	羅馬字雜誌十七號
	十二月十五日	岐阜學藝同好會雜誌ニ於テ、國語ニテ寫サレタル文章ノ發達セザリシハ、假名文ノ世用ヲ爲サマリシガ故ナリトテ、假名專用說ヲ述ブルモノアリ。	岐阜學藝同好會雜誌
	十二月十五日	田中義重、Minna Isiduro等發起シテ、茨城縣谷田部町ニ羅馬字研究會ヲ設立ス。	
	一月十日	Sumi Katsushiro『羅馬字に兼ね用ゐる漢語の制限法を望む』ト題シ、漢語ヲ廢ゼズンバ、羅馬字ヲ國字トナサンコト終ニ難カラント說ク。	羅馬字雜誌廿號
	一月	高橋五郎、『古今將來日本語並文字論』ト題シ、支那ノ言語文字ノ日本文學ニ及ボセル歴史ヲ畧叙シ、羅馬字說ヲ贊シテ羅馬字會規則ノ缺點ヲ摘出ス。	六合雜誌七三、七五

國字國語改良論說年表

年	月 日	事 項	掲載書目
	二月十日	Shiraki Kunzo『羅馬字の擴張を望む』ト題シ、羅馬字ト假名トノ利便ヲ比較シ漢字ノ害ヲ述ベ、音符文字殊ニ羅馬字ヲ採用スベキヲ論ズ。 Hirayama Kunan『やまと言葉の綴り方』ト題シ、言葉ニハ各特性アルヲ以テ、其性質ニ基キテ綴ラザル可カラズトテ、氏ノ所謂もちまへノ大畧ヲ掲ゲテ論ズ。	羅馬字雜誌廿一、廿二號
	二月二十日	羅馬字會第二總會席上ニ於テ、榎本武揚、羅馬字ノ便及ビ其普及方案ヲ説キ、米國公使ハバルド(A. B. Hubbard)新知識ノ輸入發達ト共ニ文字ノ改良ヲ要スル所以、及ビ改良方法ヲ一言シ、渡邊洪基ハ漢字ノ害ヲ數ヘ、之ヲ廢セントセバ横書體ヲ用ケルベシト演ヘ、チャムパレン(B. H. Chamberlain)ハ羅馬字雜誌ノ文章ノ依然トシテ難解ノ漢文體ナルヲ難ジ、羅馬字ヲ採用セントセバ、宜シク先ヅ文體ヲ改メテ言文一致體ニナサル可カラズト論ズ。	羅馬字新誌十號
	三月十九日	澁谷信次郎、茨城縣谷田部町羅馬字會總會ニ於テ、『假名と羅馬字との比較』ト題シ、羅馬字ノ音ヲ寫スコト假名ヨリモ精細ナル由ヲ演ブ。	四 學士會員雜誌九ノ 羅馬字新誌十一號
	四月二十三日	中村正直、學士會院ニ於テ『漢學不可廢論』ヲ演ブ。	同上
	五月八日	『日』、『語尾の變化は明かなるべし』ト題シ、羅馬字書方ヲ用キンニモ歴史的ノ假名遣ニ注意スベシト説ク。	同上
	五月二十五日	村尾愷太郎、『かなの利用は教育の經濟』ト題シ、其利用ノ點ヲ指示ス。	同上
	六月十五日		

年	月 日	事 項	掲載書目
	六月二十五日	Hirayama Kunan『話と書き物との違』ト題シ、チャムパレンノ説ヲ駁シテ何國ニテモ口語ト文章トノ異ナル例ヲ示シ、此兩者ノ相違ハ開化ノ生ミ出セル所ナリト説キ、其相違點ヲ列擧シ、文章語ハ學問ニ關スル事項ヲ記スニ適シ、口語ハ俗事ヲ寫スニ適スト述ブ。	羅馬字新誌十二、十三、十四、十五、十六、廿四
	八月十五日	矢野文雄、『日本の假名と羅馬字との論』ト題シ、假名ハ羅馬字ヨリモ便利ナリト説ク。	同上
	八月十五日	かなのてかがみニ於テ、物集高見、文章ハ必ズ話ノ如ク書ク可キ理由ヲ論ジ、矢野文雄ハ、日本ノ假名ハ日本ノ字トシテハ羅馬字ニ勝リ、羅馬字ハ歐洲ノ文字トシテハ假名ニ優ルト説ケリ。	かなのてかがみ十 四號
	八月二十五日	肥塚龍、『日本に第二の日本語を作るべし』ト題シ、世界ニ雄飛セント欲セバ、英語又ハ佛語ヲ採用シ、之ヲ第二ノ國語トナスベシト論ズ。	學海之指針二、三 號
	八月二十五日	辰巳小次郎、『駁言文一致論』ト題シ、羅馬字雜誌所載ノチャムパレンノ言文一致説ヲ駁ス。	學海之指針二、三、 四號
	八月七日	大阪いろは組ヨリ『はやがかなのしんぶ』第一號ヲ發行ス。	同上
	九月十五日	物集高見、文章ヲ寫スニ口語ノマ、ナラシメバ全國語一定シ、且言語麗雅ナルニ至ラント説ク。	かなのてかがみ十 五號
	九月二十五日	北尾次郎、『颶風の説』ト題シ、其序論ニ於テ漢語ノ害ヲ述ベ、適宜ノ文字ヲ作リテ日本語ヲ獨立セシムベシト説ク。	同上
	十月十日	イービー(C. S. Eddy)大日本教育會ニ於テ、『日本教育の進否は日本語の發達如何にあり』ト題シ、一國ヲ發達セシメントセバ普通教育ヲ盛ニセザル	學海之指針三號

年	月 日	事	項	掲載書目
明治二十一年	一月十五日	平井正俊、『文字の論』ト題シ、文字ノ職掌ヨリ論ジ、漢字ヲ排斥シ假名説ヲ贊シテ言文一致説ニ及ブ。	漢字ヲ排斥シ假名説	かなのてかがみ廿九號
	二月十五日	かなのくわい横濱組ヨリ『かなのみなと』第一號ヲ發行ス。	かなのみなと	かなのてかがみ廿九號
	三月十一日	西村茂樹、學士會院ニ於テ『日本の文學』ト題シ、文字ノ條ニ於テ漢字ノ棄ツ可カラザル所以ヲ演ブ。	漢字ノ棄ツ可カラザル	學士會院雜誌十ノ二
	四月十四日	羅馬字會第三總集會席上ニ於テ、三好退藏ハ、漢字排斥演説ヲナシ、英人イービー(C. S. Ebb)ハ、漢字假名羅馬字ニ就キテ評論シ、羅馬字採用説ニ贊成スト演ブ。	漢字排斥演説	羅馬字會雜誌十五、十七號
	十一月十五日	可カラザルコト、普通教育ノ起點ハ日本語ナラザル可カラザルコト、日本語ヲ發達セシメンニハ羅馬字ヲ採用セザル可カラザル所以ヲ論ス。	日本語ヲ發達セシメンニハ羅馬字ヲ採用セザル可カラザル所以ヲ論ス	大日本教育會雜誌六十四號
	十二月一日	ふみ、假名學校ヲ起スベシト敬ス。	假名學校ヲ起スベシト敬ス	羅馬字雜誌廿八號
	十二月十日	假名學校ヲ九段坂下玉章堂ニ開ク。	假名學校ヲ九段坂下玉章堂ニ開ク	かなのてかがみ十七號
	十二月二十五日	手島精一、『教育上羅馬字の得失』ト題シ、西洋兒童ノ例ヲ引キテ、兒童知識ノ發達上、必ズ羅馬字ヲ採用セザル可カラザル所以ヲ説ク。	西洋兒童ノ例ヲ引キテ、兒童知識ノ發達上、必ズ羅馬字ヲ採用セザル可カラザル所以ヲ説ク	羅馬字雜誌廿六號
		田代國家ト國語トノ關係ヲ説キ、外國語ヲ以テ國語ト爲サントノ説ヲ駁ス。	外國語ヲ以テ國語ト爲サントノ説ヲ駁ス	羅馬字雜誌十五、十七號

年	月 日	事	項	掲載書目
	四月十五日	かなのてかがみニテ、某『西村茂樹の日本之文字』ト題セル演説ヲ駁論ス。未松謙澄、かなのくわい大會ノ席上ニ於テ、人名地名ヲ漢字ニ記スル害等ヲ擧ゲテ、結局日本ニ一種ノ詞ヲ造リ、言文一致ノ書物ヲ拵ヘテコノ國ノ文學ヲ確定シ、文字ト國トノ關係ヲ眞實ナラシメンコトヲ希望スルヨシヲ演ブ。	かなのてかがみニテ、某『西村茂樹の日本之文字』ト題セル演説ヲ駁論ス。未松謙澄、かなのくわい大會ノ席上ニ於テ、人名地名ヲ漢字ニ記スル害等ヲ擧ゲテ、結局日本ニ一種ノ詞ヲ造リ、言文一致ノ書物ヲ拵ヘテコノ國ノ文學ヲ確定シ、文字ト國トノ關係ヲ眞實ナラシメンコトヲ希望スルヨシヲ演ブ。	かなのてかがみ廿二號
	四月	大槻文彦(かなのやのあるじ)『てがみのかきかた』ニノツマリヲ出ス。	てがみのかきかた	かなのてかがみ廿三號
	四月	宮地嚴夫、福西四郎左衛門、黒田太久馬等、言語取調所ノ創立ヲ計畫ス。	言語取調所ノ創立ヲ計畫ス	言語第一號
	五月二十五日	田代國家ニ於テ、『羅馬字にて日本人の名の書き方』ト題シ、世人ノ萬般西洋ヲ崇拜シテ之ニ模スルヲ難ジ、姓名ノ順序ハ日本流ニ爲スベシト説ク。	羅馬字にて日本人の名の書き方	羅馬字雜誌廿號
	五月	『文』社説ニ於テ、口語ノ練習ヲ獎勵シ、此練習成ラバ、言文ノ一致自ラ成ラント説ク。	口語ノ練習ヲ獎勵シ、此練習成ラバ、言文ノ一致自ラ成ラント説ク	文一ノ十號
	六月一日	かなのくわいみくらぐみヨリ『あまがさひづり』第一號ヲ出版ス。	あまがさひづり	かなのてかがみ廿四號
	六月十五日	平井正俊、『日本の文法』ト題シ、文ハ話ノ寫眞ナラザル可カラズト説キ、文法ノ改良ニ及ブ。	日本の文法	かなのてかがみ廿四號
	六月二十二日	羅馬字會第四總集會ニ於テ、佛國公使アー、シエンキキツチ(A. Schinkiewicz)ハ、歐米諸國トノ交際ヲ親厚ニセントセバ、多少ノ困難アリトモ羅馬字ヲ採用セザル可カラズト演ベ、未松謙澄ハ、初メ困難ナルガ如キハ總テ慣レザルガ故ナリト説キテ、羅馬字ノ練習ヲス、メ、プリンクラー(F. Brinkley)ハ、羅馬字ヲ採用シテ教育上ノ困難ヲ除去スベシト述べ、増島六一郎ハ、羅馬字ヲ採用セバ西洋ノ文物ヲ輸入スルニ便ナリト陳ジ、前島密ハ、漢字	羅馬字會第四總集會ニ於テ、佛國公使アー、シエンキキツチ(A. Schinkiewicz)ハ、歐米諸國トノ交際ヲ親厚ニセントセバ、多少ノ困難アリトモ羅馬字ヲ採用セザル可カラズト演ベ、未松謙澄ハ、初メ困難ナルガ如キハ總テ慣レザルガ故ナリト説キテ、羅馬字ノ練習ヲス、メ、プリンクラー(F. Brinkley)ハ、羅馬字ヲ採用シテ教育上ノ困難ヲ除去スベシト述べ、増島六一郎ハ、羅馬字ヲ採用セバ西洋ノ文物ヲ輸入スルニ便ナリト陳ジ、前島密ハ、漢字	かなのてかがみ廿四號